

1

企画制作研修 A: 伝統芸能をインクルージョン社会での生涯の学びにつなげる —— 祭囃子を通じたソーシャル・インクルージョンの実現

1 はじめに

企画制作研修 A では、音楽によるソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）をめざし、伝統芸能の持つ総合的な表現力、ノンバーバルなコミュニケーション力を生かして人々の生涯の学びにつなげる場をつくる研修を行いました。

祭囃子を取り上げ、祭囃子の演じ手、音楽心理学、生涯学習支援の専門家とともに学び合い、地域社会の中で、多様な背景を持つ人々の新たな出会いの場をつくることをめざしました。

令和 5～6 年の 2 年間にわたる講座では、受講生はまず祭囃子の実演がもたらす力を、富士元囃子連中（東京都豊島区）と目黒流貫井囃子保存会（東京都小金井市）の実技講座や祭礼のフィールドワークで体験しました。それと並行して企画立案に向けての基礎講座で音楽心理学（柴崎かがり氏：英ポーツマス大学）、生涯学習支援（工藤傑史氏：東京福祉大学）、音楽教育学研究（田邊裕子氏：山梨学院短期大学）より講義を受け、伝統芸能によるソーシャル・インクルージョンについての理解を深めました。令和 6 年度は、祭囃子の演じ手たちと一緒に、地域の人々に向けた 2 つのワークショップを企画し実施しました。

これらをふまえて、祭囃子を通じたソーシャル・インクルージョンの実現の評価として、ワークショップの参加者ならびに受講生からの声をまとめ、祭囃子を通じたソーシャル・インクルージョンの可能性について検討しました。以下に企画全体の概要と研修の評価に分けて報告します。

2 企画全体の概要

(1) 伝統芸能によるソーシャル・インクルージョンについての理解

①音楽心理学からとらえた理解

祭囃子によるソーシャル・インクルージョンとは、祭囃子の持つ日本人にとっての①基層的、原初的なリズム感、音の響き、音と音との共振に「反応すること」から始まり、②「聴くこと」「表現すること」の両面から身体を通して「主体的に体験」し、③自分自身の世界を広げるとともに、人と人との「関わり」を深めていくこととしました。

これを音楽心理学からとらえたのが図 1 です。

〈図 1〉音や音楽との出会い(例えば Gao, 2003)



②実演の体験・見学を通じた理解

2 つの祭囃子と若竹太鼓クラブ（東京学芸大学附属特別支援学校卒業生の会）の和太鼓の見学を通して、ソーシャル・インクルージョンへの以下の気づきが講師ならびに受講生に生まれました（表 1、表 2 参照）。

〈表 1〉 Inclusion による 新しい価値の発見(工藤傑史)

共有のベースづくり
参加する人々が、共通の音楽を通して、お互いを知り合い最大限に尊重しつつ、時間をかけて創り上げていくプロセスが大切である。
新しい価値の発見・創造
それぞれが強みや独自の感覚や方法を持っていることをお互いに知り合い、理解し合うことから新しい価値が発見・創造されていく。そのプロセスを経て出来上がったものは、従来の価値観を越え、その背景にあるものの理解につながる。

〈表2〉

受講生の「DEI(Diversity多様性・Equity公平性・Inclusion包摂性)」に対する理解の深まり(柴崎かがり)

① Inclusion	参加者ひとりひとりが公平に貢献できる雰囲気づくり
② Motivation	参加者のモチベーションを高め、積極的にやってみたいと感じるような雰囲気づくり
③ Diversity	いろいろな背景の参加者がいることを理解する
④ Understanding	多様性の受容ではなく理解・尊重する大切さ
⑤ Lifelong Learning	「楽しかった～」で終わらずに、その体験を次につなげるためにどうするのか

(2) 受講生のマイプランの提案(令和5年度)

ここまでの研修をふまえ、受講生それぞれに「祭囃子を通じたソーシャル・インクルージョン」のマイプランを作成してもらいました。長期的なプランと短期的なプランの2つにまとめることができます。

長期的なプラン

- ・伝統芸能・民俗芸能の社会への「種まき」として、伝統音楽に触れる場づくりを考える
- ・傍観者から当事者になれるようなプラン

短期的なプラン

- ・貫井囃子と協力して、地域の人々を対象とした複数のワークショップを開催する

(3) 「貫井囃子でつながるワークショップ」の企画制作(令和6年度)

令和6年度は、このうち短期的なプランを取り上げ、「貫井囃子でつながるワークショップ」の企画制作に向けての準備・企画・運営のための研修プログラムを中心に行いました。

●ワークショップの目的

ワークショップの目的は、貫井囃子を多様な背景を持った参加者が共に体験することで、その体験を通して参加者同士が相互に理解し合いつな

りを生む、としました。

●ワークショップのテーマの決定

ワークショップの目的、活動内容がわかり、参加してみたいと思えるテーマをつくるという課題をもとに受講生から集まった多数のテーマ案を集約し、以下のテーマに決定しました。

「みんなでのぞいてみよう 貫井囃子のせかいー 聴いて、見て、やってみようー」

●ワークショップの活動内容

当初のねらいとしては、一般参加者の継続的な参加による参加者同士のつながりを期待して、令和6年10月26日(土)ならびに11月30日(土)の2回のワークショップを設定しました。実際には、第1回のワークショップでの反省点をふまえて、第2回の内容を改善し、さらに発展させたことで、大きな成果につながる事となりました。

表3に、第1回・第2回のワークショップの共通点、改善点(下線部分)を示しました。

〈表3〉

ワークショップの構成における要素・活動内容(田邊裕子・加藤富美子)

活動内容を定めるための要素
貫井囃子の持つ総合的な表現力：ノンバーバルな表現力、リズム感覚、身体の使い方、音楽との一体感
活動内容
<ul style="list-style-type: none"> ・映像による貫井神社祭礼での貫井囃子の紹介 ・貫井囃子による演奏・踊りを鑑賞する ・貫井囃子から楽器の奏法、踊り方を教えてもらう ・クイズコーナー「貫井囃子のひみつ」 ・付け太鼓ならびに大太鼓を、靴箱、大小の収納整理用の蓋がついた紙箱などを代替楽器にして、全員で合わせながら体験する ・狐、ひよっとこのお面づくりをして、それを被って踊る
太鼓のリズムと踊りの手の基本(「仁羽」)
<ul style="list-style-type: none"> ・リズム：「テンテテツク ステック テンツクツ」(付け太鼓の口唱歌)、「テンスデトン ステドン テンドンドン」(付け太鼓と大太鼓を合わせた口唱歌) ・踊りの「手」三種：歩く手、見る手、被る手

●ねらいからとらえたワークショップの参加者

ワークショップは定員40名とし、ちらし、市報、ホームページなどによる広報で募集しました。第2回には合計39名(内こども8名)の近隣住

民を中心とした参加を得て、貫井囃子の体験を通して、地域社会の中で多様な背景を持つ人々の新たな出会いの場をつくることにつながりました。

3 「祭囃子を通したソーシャル・インクルージョンの実現」の評価 ——受講生の研修成果と評価

(1) 受講生の研修内容

企画制作研修Aの受講生14名のうち、1名は音楽を介した高齢者施設や障害児教育の現場での教育実践者、3名は音楽教育関係者です。10名は美術史、民俗芸能、英文学を専攻する大学生で、社会包摂とアートマネジメントについて当該講座が知見を広めるきっかけとなりました。

受講生は企画制作実践に先立ち、貫井囃子保存会と貫井神社祭礼について以下の実演を通し理解を深めました。

- 令和6年8月4日（土） 地域における「貫井囃子を知る」ワークショップ [貫井囃子の実演、貫井囃子に関する講義、貫井囃子の締太鼓と踊りの体験]
- 令和6年9月14日（土）、15日（日） 貫井神社祭礼見学会 [本部での演奏と山車での演奏の見学]

祭礼見学会は、貫井囃子が継承されてきた地域の儀礼文化に触れ世代を超え伝統文化を受け継ぐ土壌を育ててきた方々と交流する好機と捉え、インタビューと観察記録の作成を核としたフィールドワークの技法を学びました。演奏の合間を利用して実施したインタビューでは、「宵宮には貫井囃子との地縁・血縁で繋がる祭礼の参加者が多い」、「祭礼囃子を通して相互に交流している武蔵国分寺本村祭囃子連は先代から40年来の付き合いがある」、「近隣ではお囃子をテンツクと呼ぶ」といった詳細な情報が集まりました。

後に共有した受講生の観察記録では個々の視点と文章表現の多様性が示唆され、記録方法に正解はない、口伝等は事実確認が必要であるとの気づきを得ました。実はこの観察記録が、その後ワー

クショップで受講生を悩ませます。

では、ソーシャル・インクルージョンの実現に向けた実践的な取り組みを受講生が観察し客観的に記録することには、どのような意義があるのでしょうか。以下、受講生の内省について自由討論と観察記録から考察します。

(2) 受講生の研修の成果——反省・内省から自己認識へ

受講生に対し、ワークショップ終了後、①研修を通して自身が理解したソーシャル・インクルージョンとは何か、②研修で感じた違和感、悔いが残ったことは何か、という2点について質問し自由に討論したところ、ほぼ全員がワークショップについて回答しました。具体的には、観察記録の重責、企画運営の難しさ、参加者との関わり方の工夫、準備不足、情報共有と役割分担について多数の受講生が指摘しました。獅子舞を見て怖がり泣き出す子どももいて、「最前列に着座させた子どもが保護者と離れてしまった」ことを複数の受講生が反省点として挙げました。一方、祭囃子を体験した参加者の「一体感」や「雰囲気づくり」といった個人の印象や感覚に左右される観点については、異なる視点や意見が示されました。これは観察者が一方的かつ主観的に眼前の場面を切り取りやすく、独断の評価を下す可能性を示唆しています。そのため、観察記録を分析する際には、録画・録音した記録を複数の分析者が議論した上で考察することが必要です。ただそのためには録画・録音についての倫理的な手続きが必須です。

特筆すべきは、受講生からソーシャル・インクルージョンが実現できたのかという自問自答にも似た声があがったことです。研修への関わり方について、当初は自身の行為を反省するのみにとどまっていたのですが、討論の中で徐々にメタ認知的な視点を獲得し、個々の感想を超え客観的に内省する意識の変化が認められました。貫井囃子を介して構築されたワークショップの場はインクルーシブだったのかという疑問は、明らかに自己

に対してではなく、他者とその場を共有する共同体全体への配慮から出た問いかけです。客観的な観察の視点への移行は、当該研修を通じて受講生にもたらされた成長の結果だと考えられます。

(3) 受講生の記録からとらえた「祭囃子を通したソーシャル・インクルージョンの実現」の評価

受講生の内省を含む観察記録は、「観察の6つの観点」(表4)としてまとめました。受講生は、内省と自己認識のプロセスを通じてワークショップの参加者の何を観察し、その観察の視点をソーシャル・インクルージョンの理解と実現にどう結びようとしていたのでしょうか。

〈表4〉

受講生の「観察の6つの観点」(柴崎かがり)

参加者の背景	家族で学ぶ	WSの繋がり
リアルタイム	参加者の変化	種まき

このうち「参加者の背景」、「参加者の変化」の2点について取り上げます。ワークショップには、貫井囃子の関係者や近隣住民とともに貫井囃子を初めて知ったという幅広い層が参加しました。そのため、企画運営側は参加者の背景について情報共有し、親子が一緒に参加できる配席、音量や獅子など子どもの恐怖心や心理的影響への考慮など、共に平等に学び合うにはインクルーシブな環境がどうあるべきか熟考する必要性がこの記録からわかります。

もう一つは、参加者の変化についてです。ワークショップ開始直後は表情や取り組み方から参加者の緊張が感じられましたが、徐々に緊張が解けると変化が起きます。例えば、空箱の太鼓と踊りの体験を通して他者と感情を共有し「この箱の音、いいわよね」などと声を掛け合う、泣いていた子どもが笑い声をあげるなど明白な態度の変化が見受けられたのです。これは、音楽に対する反応として「幸せホルモン(オキシトシン)」が生成された結果であり、生物学的にも貫井囃子の体験が参加者に好影響をもたらしたものと思われま

す(例えば、MacDonald et al, 2012)。楽しさを他者と共有したいという感情の発現は、笑顔、笑い声、手拍子、拍手となり、一体感が感じられる場が構築されたことでさらに顕著になります。これらはソーシャル・インクルージョンとして、貫井囃子を通した出会いの場の形成という目標達成を裏付ける証拠となりえます。参加者のアンケートで好意的かつ高評価の回答が数多く得られた要因です。

(4) インクルーシブな社会をめざす方略

インクルーシブな社会の実現のためには、継続的な努力が必要です。一回限りではなく、次のステップに繋がるような「種まき」を常に意識して継続することで、社会は変化していきます。多様性を尊重し、違いを認め合い、バリアをなくし、共に支え合い「足場(scaffolding)」を架けることで実現可能となります。実現に向けてのオートマネジメント人材の育成が望まれます。

【参考文献】

- Gao, T. (2003). The Effects of Different Levels of Interaction on the Achievement and Motivational Perceptions of College Students in a Web-based Learning Environment. *Journal of Interactive Learning Research*, 14(4), 367-386.
- MacDonald, R.A.R., Kreutz, G., & Mitchell, L.A. (Eds.) (2012). *Music, health and wellbeing*. Oxford University Press.

(加藤富美子, 串田紀代美, 柴崎かがり)